

奈良・人と自然の会



第11回東海自然歩道・自然観察会(7月2日)

三木正明

前日の雨がうそのような晴天、平日にもかかわらず29名が参加されました。名張駅からバスで50分、スタート前に自己紹介があり、簡単なストレッチで足をほぐして曾爾高原をめざしてスタート。少し歩いて振り返ると「あれが鎧岳です」との説明、その奇形に目を奪われます。少し行くと濃い赤紫のウツボグサに出会いました。目をみはる美しい色にうっとり、さあこれから先輩の説明を聞き逃さないように耳はダンゴ状態。しばらく行くと枝の葉の上段に小さな白い総状花序、「リョウブの花です」、初めて見ました。樹皮がサルスベリに似ているのでヤマサルスベリとも言おうです。途中、クワ畑があり、クワとコウゾの葉の違いを教わりました。やがて道端に数本のツバキ、サザンカとの違いの話に首を突っ込み教わりました。①開花時期がサザンカの方が早い。②ツバキは花全体が同時に落ちる。(ただし、真ん中のめしべはすっぽり残る。男性ははかない?)。③サザンカは実ができない。④葉を比べるとツバキの方がつやがある。但し、必ず例外があるので決め付けないことと聞き、講座である先生が自然界は例外ばかりと言われたのを思い出しました。やがて木立の中に一部の葉が白い木に出会い聞くとマタタビ、「猫にマタタビ」とは聞くが出会うのは初めて。その枝の下に表面がでこぼこした丸い実のようなものが下がっているのは虫コブだそうです。頂いた資料によりますとマタタビタマバエによる虫コブで、乾燥したものは漢方薬で強壮、疲労回復に効果があるそうです。やがて行くとキイチゴが沢山の実をつけていました。黄色の実のナガバモミジイチゴは顔に似合わずとてもおいしい、特にはちきれんばかりによく熟れたものはまことに美味。ただし鋭いとげに注意。赤い美しい実のニガイチゴも名前と異なりおいしい、こんな時に食べる木の実とは格別の味がしました。さらに行くと木陰にうすいピンクのかわいい百合、聞けばササユリ、あー聞いたことがあります。こうして出会えたことに感激！さらに進むと黄褐色のキノコのような群生、ツチアケビだそうです。寄生植物でナラに寄生することが多い、横にいるのがコナラです。なるほど、納得！パーと眼前が広がると曾爾高原。少年自然の家の前で三々五々昼食。昼食後、お亀池(奈良県唯一の湿原)を一周、炎天下だが暑さを忘れる草花、鳥との出会いがありました。青々したすすき原の急斜面を登り詰め、いよいよ中太郎生のバス停めざしてのコースです。途中、ニワトコが赤い小さな実をつけていました。接骨木とも言っていると聞き図

鑑で調べますと、枝や幹の黒焼きは骨折、打ち身の薬になるそうです。今度は細い茎の先に細い棒状に小さな花がつくハエドクソウに出会いました。これも図鑑によりますと根のしぼり汁でハエとり紙を作ったそうです。いつもながら先人は植物を生活にフル活用したことに驚かされます。やがて木立がすぎ田畑に出て振り返りますと今降りてきた峰がそそり立ってとても美しかったです。コース中、鳥もホオジロ、セッカ、コヨシキリなどと出会えましたが声を聞くのが精一杯でした。リーダーの好リードで15分前にバス停に到着。小休止して記念撮影後バスに乗車。4時前に名張駅に到着。最終回なので打ち上げ会、殆どの方が出席、賑やかな内に解散となりました。色々な木、草花、鳥との出会いがあり何より興味深い説明を聞き、さらに会の素敵な方々との出会いがあり、初めての私にはとても楽しく有意義な観察会でした。お世話いただいた多くの方々、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。



奈良県環境フェアに出展

樋口 善雄

奈良県フォーラム主催のフェスティバルが6月28日広域地場産業振興センターで開催され、今年度から当会も知名度を少しずつ上げていこうと出展しました。

＜内容＞「自然工作教室」①「ヨシのブッチ切り笛」散歩のお伴に！ ②「温度計つきモックン」現在温度の測定に！ ③「セミ丸クン」鳴けない蝉はメスだよ！

＜スタッフ・来場者＞フェスティバルの来場者は昨年より200名多い約1400名。うち当会のブースを覗いた人は約200名であり、8名のスタッフは対応に席を暖める暇もない忙しさであった。持参の弁当も立ち食い状態、16時に人の列がまばらになって、初めて椅子にベッタリと腰が落ちた次第！！

＜反響＞＊来客層は大きく捉えて①親子連れと②大人の3人～5人グループの2通りに分かれる。①は単純にモノを楽しむ人達。②の大人のグループは、各自地元のイベントで催し物を利用しようとして調査に来た熱心な方たちと思われた。したがって一番人気のセミ丸クンの材料調査や発音原理に就いての多くの質問が寄せられた。

＊今回「奈良・人と自然の会」の看板にも興味を示す人があった。今後はボードの数を増やして、色紙、短冊、額、写真等を飾るなりして、徐々に拡大展開できればと考えた。そのためにはスタッフの協力を御願います。

吾、土とはあわれなるものにて、人や車に押しつぶされ、犬や猫に糞つけられ、生ゴミや産廃で覆われ、まともにお日さんの顔を見たためしなし。しかし吾、土は常に人や牛馬の足の裏から見つめつづけている故、ものごとの深層が良く分る。所詮、野菜も米も土の化物、牛や馬も吾の化物、人の体も土の化物なのに。吾を認め敬った人がいたことはせめてもの慰めか。我が母、土の塊たるその地球に報告しておこう。

人類発祥の地、遠きアフリカケニアの言い伝えられし格言に「この母なる大地「地球」を大切に下さい。それはあなたの親から授かったものではありません。それはあなたの子供たちから預かっているものなのです」。また紀元前六世紀、ギリシャのさすらいの哲学者クセノファネスは、「いっさいは土より生じ、土にかえる」と喝破した。

明治の文豪徳富蘆花はその著書「みづのたはこと」¹⁾の「農」中で「(一) 土の上に生れ、土の生むものを食ふて生き、而(さう)して死んで土になる。我儕(われら)は畢竟(ひっきょう)土の化物である。土の化物に一番適当した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活の方法の中、尤もよきものを摘み得た者は農である。(二) 農は神の直参である。自然の懷に、自然の支配の下に、自然を賛(たす)けて働く彼等は、人間化した自然である。神を地主とすれば、彼等は神の小作人である。主宰を神とすれば、彼等は神の直轄の下に住む天領の民である。網島梁川君の所謂「神と共に働き、神と共に楽しむ」事を文義通り実行する職業があるならば、其れは農であらねばならぬ……(九) 土なるかな。農なるかな。地に人の子の住まん限り、農は人の子にとって最も自然且つ尊貴な生活の方法で、且つ其救であらねばならぬ」。

カーター、デールは「土と文明」²⁾の中で「文明の進歩とともに、人間は多くの技術を身につけたが、己の食料の重要な拠りどころである土壌を保全することを習得した者は稀であった。逆説的にいえば、人類の最もすばらしい偉業は、己の文明の宿っていた天然資源を破壊に導くのがつねであった。あらゆる動植物は事実上、“自然淘汰”の法則によって土壌生成過程を維持することを強いられた。どんな植物も土壌浸食の阻止に力を貸さなければ、山腹の傾斜面で生き永らえるものではなかった。どんな種類の動物も、植物や土壌の不断の成長を支援するものでなければ、生き永らえてゆくに足る知能とか英知を啓発できなかった。ある種の動物や植物が土壌を破壊する方向へ進化した場合、それは、その食料の重要資源を破壊するのみか、往々にして己を破壊に導くのがつねであった」。

セイモアーとジラルデットはその著書「遙かなる楽園」³⁾の中で「当時は気がついていなかったが、今、私は、われわれは土の生きものなのだと知っている。人間はミミズと同じように土壌の生きものなのだ。もし海洋のプランクトンも陸上の土壌と同じようにとするならば、われわれの体を構成するすべてのものは土壌からきたものなのである。たとえ科学者が石油か天然ガスから食べられるものを作り出しえたとしても、石油も天然ガスも遠い昔の土の産物である以上、われわれはやはり土の生物なのである。人類はまだ光合成に成功していないし、そうなる見通しも立っていない。そう考えれば、足下の大地

が流されさってしまうのを見るのは身の毛のよだつ思いである」。⁴⁾

江戸時代 300 年がものの見事なる循環型社会が成立したことについて、近代有機化学の父と呼ばれるリービッヒは「化学の農業および生理学への応用」⁵⁾の付録論文(筆者はプロシヤ王国東アジア調査団員マロン博士)の中で、江戸時代末期の日本農業について、「朝には土地の産物を都市に運んだ純粋な人夫の列が、夕には二つの肥桶を担いで行くのをみかける。……つまり、われわれの前には、自然力の完結した循環の壮大な図式が成りたっているのもあって、連鎖のどの環も抜け落ちることなく、次々と手を取り合っているのだ」。大和のスイカも同様で、農家は年末には長屋の家主に肥のお礼に参上した由。つまり肥は農家にとって最重要なる資源であったのです。

有吉佐和子さんは「複合汚染」⁶⁾の中で土を食べさすイギリスの養豚業者の話を書いています。「豚小屋すなわち家屋のなかに豚が閉じ込められると、生後一ヶ月ぐらいで白色下痢にかかりやすくなる。私はこれらの若い豚に、腐植が多くあって化学肥料が施されたことのない土地から新鮮な土壌をとって与えると、この病気にかからないということを申し分なく証明した」。土を食べさす話はなにも家畜に限ったことではなく我々人類も薬として食べたという話は世界各地にあるそうです。⁷⁾

いずれにしても、地球ガイアという生命体の中で土を語る時、「土は生きている」「土は呼吸する」などの言葉が使われています。それは無数の生きものの棲家であり、生産者・消費者・分解者を育てているからなのです。しかし人類は破壊者の路を進んでいくのでしょうか。それとも共生の路を共に歩むのでしょうか。金子みすずは土について美しくもおおらかに、そして少し物悲しく詠っています。「かあさん知らぬ/草の子を/何千万の草の子を/土はひとりて育てます/草があおあおしげったら/土はかくれてしまうのに」。

参考文献

- 1) 明治文学全集(昭和41年):徳富蘆花集。筑摩書房
- 2) カーター、デール「山路健訳」(1975):土と文明。家の光協会
- 3) セイモア、ジラルデット「加藤迪・大島淳子訳」(1988):遙かなる楽園。日本放送出版協会
- 4) 陽捷行(1994):土壌圏と大気圏。朝倉書店
- 5) リービッヒ「吉田武彦訳」:化学の農業および生理学への応用。北海道農業試験場研究資料
- 6) 有吉佐和子:複合汚染。新潮社
- 7) 岩田進午(平成3年):エコロジカル・ライフ 土のはたらき。家の光協会



仏教と蓮（ハス）



寺田正博

泥中の蓮（でいちゅうのはす）

ハスは、よどんだ水底で芽を出して成長しやがて茎を伸ばして葉を水面の上に開き、花も水上高くに咲かせる挺水植物であり、スイレンは、葉が水面に浮く浮水植物である。

水底の泥から生まれても、水上の汚れのない美しい花を開くので、まわりの濁った悪徳に染まらずに清らかさを保つことの譬えとされている。こういう考え方は、主として仏教に由来するもので、「法華経」は、白蓮華（ハス、サンスクリット語プンダリカ）にたとえられる正しい教えの教典という意味であり、道を学んで世間の法に染まらないことは、蓮華が水に在るに似る、と説かれている。そのほか、多くの仏典でハスは浄土の莊嚴（美しくかざること）を示す花として記される。

仏教と蓮華（はす）の出会いを仏伝には、

「ゴータマ菩薩が母マーヤ夫人の胎内にはいる夜、地中から一本の蓮華が咲き出る。

この蓮華の世界中のありとあらゆる霊葉が蜜となっておさまっており、ブラフマンの神はこれを胎内の菩薩にすすめる。やがて月満ちて菩薩は母の右脇腹から歩み出る。生まれたばかりの菩薩が大地を歩むと大地が割れ大きな蓮華が咲きでる。菩薩はこの蓮華の中に立って第一声をはなつ。……」とある。

蓮華には、パドマ（padma、紅蓮華）、ウタパラ（utpala、青蓮華）、ニーロートパラ（nilotpara、青蓮）、クムダ（kumuda、黄蓮華・白蓮華）、プンダリーカ（pundarika、白蓮華）、などの五種があることが、仏典に説かれている。

神仏の台座に蓮華を用いる思想はすでに仏教以前からインドにあったが、二、三世紀から仏像崇拝が盛んになるにしたがって蓮華座は仏像専門になったとおもわれる。

葉柄から出る蓮糸をより合わせて織物（蓮糸織）にすることもあるが、極めて貴重品で脆く弱いから大きなものはできない。当麻寺にある縦横丈三尺の極楽浄土の大曼陀羅は、蓮糸で織ったという寺伝があるようだが、しかし大賀博士（大賀ハス発見者）が調査したところハス糸ではなく絹糸を用いた綴織であったそうである。しかし本当にハスの糸を利用した織物も残っている。広寿山の弥陀三尊図、他。

ハスの葉柄、花軸はアルカイドを含み収斂、止血薬となり、ハスの実（蓮子）は古くからの食料であり、これを数珠にすれば功德万倍といわれている。また花拓とともに腎臓、胃腸病の漢方薬でもある。蓮根も古代インドとの滋養強壮剤で捨楼漿（しゃるしょう）と呼ばれる重要な薬用ジュースである。

ハスとスイレンはどちらもスイレン科に属する多年生の水草であるが、仏典ではともに蓮華と訳され英語でもロータスというハスの呼び名がときとしてスイレンにも使われるので混同されやすい。しかし形態的にはずいぶん違った特徴がある。

また、ハスは発熱植物ともいわれ花の温度は、気温が10℃に下がっても、ほぼ32℃に保たれている。ハスの花の中でもっとも発熱する場所は花托である。花びらが開きはじめる少し前から発熱しはじめ、開ききると発熱を終える。

ハスはお盆にはなくてはならない素晴らしい花である。

合掌

参考引用文献 「仏典の植物」 満久崇麿 「仏教植物散策」

「植物ことわざ事典」 足田輝一 「植物の雑学事典」 日本実業出版社

吾、土とはあわれなるものにて、人や車に押しつぶされ、犬や猫に糞つけられ、生ゴミや産廃で覆われ、まともにお日さんの顔を見たためしなし。しかし吾、土は常に人や牛馬の足の裏から見つめつづけている故、ものごとの深層が良く分る。所詮、野菜も米も土の化物、牛や馬も吾の化物、人の体も土の化物なのに。吾を認め敬った人がいたことはせめてもの慰めか。我が母、土の塊たるその地球に報告しておこう。

人類発祥の地、遠きアフリカケニアの言い伝えられし格言に「この母なる大地「地球」を大切に下さい。それはあなたの親から授かったものではありません。それはあなたの子供たちから預かっているものなのです」。また紀元前六世紀、ギリシャのさすらいの哲学者クセノファネスは、「いっさいは土より生じ、土にかえる」と喝破した。

明治の文豪徳富蘆花はその著書「みゝずのたはこと」¹⁾の「農」中で「(一) 土の上に生れ、土の生むものを食ふて生き、而(さう)して死んで土になる。我儕(われら)は畢竟(ひっきょう)土の化物である。土の化物に一番適当した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活の方法の中、尤もよきものを摘み得た者は農である。(二) 農は神の直参である。自然の懷に、自然の支配の下に、自然を賛(たす)けて働く彼等は、人間化した自然である。神を地主とすれば、彼等は神の小作人である。主宰を神とすれば、彼等は神の直轄の下に住む天領の民である。網島梁川君の所謂「神と共に働き、神と共に楽しむ」事を文義通り実行する職業があるならば、其れは農であらねばならぬ・・・・・・(九) 土なるかな。農なるかな。地に人の子の住まん限り、農は人の子にとって最も自然且つ尊貴な生活の方法で、且つ其救であらねばならぬ」。

カーター、デールは「土と文明」²⁾の中で「文明の進歩とともに、人間は多くの技術を身につけたが、己の食料の重要な拠りどころである土壌を保全することを習得した者は稀であった。逆説的にいえば、人類の最もすばらしい偉業は、己の文明の宿っていた天然資源を破壊に導くのがつねであった。あらゆる動植物は事実上、“自然淘汰”の法則によって土壌生成過程を維持することを強いられた。どんな植物も土壌浸食の阻止に力を貸さなければ、山腹の傾斜面で生き永らえるものではなかった。どんな種類の動物も、植物や土壌の不断の成長を支援するものでなければ、生き永らえてゆくに足る知能とか英知を啓発できなかった。ある種の動物や植物が土壌を破壊する方向へ進化した場合、それは、その食料の重要資源を破壊するのみか、往々にして己を破壊に導くのがつねであった」。

セイモアとジラルデットはその著書「遙かなる楽園」³⁾の中で「当時は気がついていなかったが、今、私は、われわれは土の生きものなのだと知っている。人間はミミズと同じように土壌の生きものなのだ。もし海洋のプランクトンも陸上の土壌と同じようにするならば、われわれの体を構成するすべてのものは土壌からきたものなのである。たとえ科学者が石油か天然ガスから食べられるものを作り出しえたとしても、石油も天然ガスも遠い昔の土の産物である以上、われわれはやはり土の生物なのである。人類はまだ光合成に成功していないし、そうなる見通しも立っていない。そう考えれば、足下の大地

ネイチャー なら
奈良・人と自然の会

〔9月度例会〕 明日香の彼岸花

万葉のふるさと明日香の棚田に彼岸花が咲き誇る9月、環境カウンセラー河野猪太夫先生をお迎えして、稲穂がたわわに実る棚田のあぜ道の素朴な花の観察会を開催いたします。 気楽にご参加ください。

〈日 時〉 : 9月19日(金)
〈集 合〉 : 近鉄 飛鳥駅 飛鳥総合案内所 午前9時10分
〈講 師〉 : 環境カウンセラー 河野猪太夫 先生
〈交 通〉 : う
西大寺〔橿原神宮前行急行〕8:20…八木8:45…橿原神宮前8:50乗換
近鉄阿部野橋〔吉野行急行〕8:20…橿原神宮前9:01…飛鳥9:04 着
〈担 当〉 : 寺田 正博

アンケート結果

発送数: 89通

回答: 57通

15年5月11日集計

1. 今まで行事に参加した方: 43名

2. 参加行事、人気ランク

東海自然歩道: 13件 すべて良し: 6件 野鳥観察: 6件 大字陀薬草園: 5件
奈良公園樹林観察: 4件 葛城古道: 4件 新春講演(昆虫の話): 4件
その他(大台ヶ原・飛鳥川源流・法隆寺・佐紀佐保路): 各1件

3. 今後の行事への参加希望 参加する: 31名 場合により参加する: 24名

4. 意または興味ある分野

植物: 28件 野鳥: 13件 環境: 13件 歴史文化: 8件 自然工
作: 6件 ビオトープ: 5件 昆虫: 2件 その他(森林・里山・野草料理・
池・巨木観察・有機野菜・木彫・地域の歴史と自然): 各1件

5. 環境調査活動で参加したいもの

社叢林調査: 27名 タンポポ調査: 6名 メダカ調査: 4名 カエル調査:
2名 巨木調査: 1名

6. 行事のお世話をしていただけますか

はい: 8名 場合によりOK: 23名 いいえ: 6名 どちらとも云えない: 10名

7. 今後の行事についての意見・希望

植物の定点観測を行う: 県の行事等に参加する: 環境問題への取り組みを行う: 東海
自然歩道観察は季節を変えて続ける(マップ作りも実施): 幹事以外の方にも行事のお
世話を願います: クラフトを取り入れる: 歴史を取り入れる

8. 今後の会の在り方についての意見

社会貢献を: テーマ別観察会を毎月行う: フィールドを決める: 気楽な会に: 機関紙
が楽しみなので続けて行って欲しい

*アンケートにご協力ありがとうございました。ご意見を参考に幹事会では前向きに検討させていただきます。

2003年7月度定例幹事会報告

1. 日時：2003年7月4日（金） pm6：00～9：00
2. 場所：奈良県立文化会館
3. 司会：弓場 書記：阿部
4. 議事：

〔報告事項〕

* 会長：奈良県庁より当会の活動内容、その他を知りたい、との要請があり、7月7日に会報等も持参し詳しく説明を行う。このきっかけの一つに奈良環境フェアへの出展もあった。会の活動が認知されてきている事を感じる。会員各位の更なる積極的な活動を希望する。

①会員動向他：新会員1名で79名。

②東海自然歩道：第10回参加者31名。第11回27名。これをもって第一回シリーズ終了。延参加者314名で盛況だった。全回参加者：松本厚子氏、9回参加者が5名。10月より折り返しコースで第二回シリーズを行う。*7月2日曾爾高原お亀池での白い花はツレサギソウ属のミスチドリと同定（寺田）。

③生駒市西畑町 棚田見学会

大阪シニア自然大学および当会より計14名が参加して下見と地元の方々との交流会を行う。広い面積の棚田であり、放置されて久しい場所もあり、さらに下見検討を重ねて青写真あるいは方向性が見えた段階で、本会としての意志を会員に計りたい。7月6日有志にて草刈を行い、地元の方々との理解も深める（会長）。

④奈良県環境フェア（樋口：別記）

〔討議事項〕

①2003年度後半の月例行事の確認（別記）

②その他：*社叢林調査グループの立ち上げは、今秋頃を目ざして指針をつくれるよう作業を進めたい。*会旗は7月中に出来上がる予定。*機関紙の配布を積極的に考えて行く。*黒髪山フィールドにて工作教室を行い、指導員の養成にも資す。

編集後記

各部の決定事項や連絡事項および投稿は8月20日までに下記までお送りください。

連絡先：勝田 均

奈良・人と自然の会事務所

会長 川井 秀夫